

## 被災地で私が出会った英雄たち

～ 3.11 10年後のことづて～<sup>1</sup>

渡辺祥子

### 語り継ぎとロゴセラピー

コロナ禍という、日常ではあまり使う事のなかった「禍」という言葉が標準化してしまった、東日本大震災発生から10年目となる2021年の春3月。被災地のひとつである宮城県仙台市を拠点に語り継ぎの活動を続けてきた私は、一冊のエッセイ集を上梓した。タイトルは、『困難を希望に変える力～3.11 10年後のことづて』（3.11を語りつく会刊）。表紙の帯には小さく文字が添えられている。それは、「被災地で懸命に生きる11人のエピソードとフランクルの言葉」。

忘れたくても忘れられない沢山の辛い思い出がある中での忘れてはいけない大切なことを語り継がなければ、との強い思いのもと、被災の地で生きる人々の言葉（生きる姿）を伝え続けてきた私。その傍らには、常にフランクルやロゴセラピーの思想があった。しかし、当協会関係以外の発表で、それを前面に打ち出すことはなかった。専門家でもなく学びも浅い自分にはその資格はないのではないか、など己を世に問う事への恐れが先に立っていたのだ。

けれども震災からの日々私を支え続け、常に語り継ぎのベースにあったフランクルの言葉やロゴセラピーの思想を、10年という節目の年にしっかり残さなければ…。それもまた、ひとつのく被災地からのメッセージ（ことづて）>であると考え、被災の地で生きる人々の姿をロゴセラピー的な視点で捉えて紹介しようと覚悟を決めたのだ。

こうして出版したエッセイ集。思いもかけず、10年前に被災地を支援して下さった多くの方々からの反響があり、注文が相次いだ。「震災後にボランティアに行った町やお会いした方々のことがいつも気がかりでした」、「今はもう年をとってそちらには行けませんが、何かの支えになれば」、「知り合いにも読んでもら